

2 1. 大分県における乳牛後継牛育成預託牧場の取り組み

農林水産研究指導センター

○森本慎思

【はじめに】

酪農産業において大規模化が進展する中で、従来の家族経営型から雇用型への転換が進むとともに、家族経営型では作業の外部委託やロボット化による省力化が進んでいる。

特に育成牛の北海道への外部預託は、大分県酪農協及び全酪連を通じて以前から行われているが、県内酪農家が生乳代金として得た収入の中から北海道に育成コストを支払う構図となっており、酪農業の地域経済貢献という観点からはマイナス面が大きかった。

そこで、県内において大分県酪農協を中心とした育成牛預託システムを構築し、後継牛育成作業の外部委託の推進及びこれにより生じる空き牛舎や労力の余力を活用した生乳生産量の拡大等に取り組んだので、その経緯について報告する。

1. 緊急大分県酪農再構築検討会の設置

平成25年12月に広域普及指導員、県酪酪農部より県酪組合長、県畜産技術室長へ説明を行い、緊急大分県酪農再構築検討会を設置した。

検討会は飼料高騰対策部会、酪農生産基盤強化部会の2部会制とし、育成牛預託牧場は酪農生産基盤強化部会にて設置に向け協議を重ねた。

2. 育成牛預託牧場の開始

育成牛預託牧場は平成27年6月から運用を開始した。開始当初は、後継牛を確保するため、お金を払って自家育成牛を預けるシステムに対し酪農家の抵抗感が強く、預託頭数は低調であった。

3. 育成牛預託牧場における体測、繁殖成績管理について

滑り出しの預託頭数は低調だったが、毎身体測（体高、体重）を実施し、繁殖管理実績とともに育成牛預託牧場の成績を組合員に対して開示し、利用推進を図った。

4. 利用農家における預託頭数増加の推進

一度預託牧場を利用した農場では、徐々に自家育成牛を預けることに対する壁が低くなり、平成30年5月から育成牛預託牧場及び大分県酪農協が利用農家を巡回し預託頭数の拡大を推進した結果、現在では13戸で141頭と施設の収容頭数一杯となっている。

5. 利用農家における生乳出荷状況

利用農家における平成26年と平成30年の出荷乳量を比較すると 5%以上増加 10戸、±5%以内 1戸、5%以上減少 2戸という実績であり、育成預託牧場は増産に対して一定の役割を果たしている。

6. 今後の展開

- ・若齢牛預託制度の導入
- ・収容頭数の増加